観自在

弘長寺寺報
第三十二号
平成二十八年新春（年二回発行）

感動の極み！（七百五十年の時を超え）
開基様　主君　北条時頼公に拝謁叶う

弘長寺住職　森田裕光

あけましておめでとうございます。

平成二十八年の幕が開きました。

弘長寺護持会研修は十一月十日～十一日、（一泊二日）弘長寺開基・藤原満資公の主君・北条時頼公の菩提寺　鎌倉建長寺様に拝登いたしました。

二年前、建長寺専門調査研究員の鈴木　佐（たすく）先生とのご縁をいただき、鎌倉行きを決断し　鈴木先生に建長寺様との間を取り持っていただき　建長寺様では大変なおもてなしをいただきました。

平素は非公開である山門の上にも上がらせていただき　立派な五百羅漢様を拝むことができました。

一番奥の大方丈にて　時頼公の御前（須弥壇）に満資公の位牌を置かせていただき　本尊上供の導師をさせていただきました。

感激のあまり目が潤みました、私でさえ感激したのですから、開基様　満資公のお悦びは如何ばかりであったことでしょう。

そして客殿に通されお茶をいただきながら　高井宗務総長老師のお話を三十分ほど拝聴し　全員が建長寺の御本を頂戴しました。

私などは、五・六センチの厚さの資料や御本を八冊くらいいただきました。

残念ながら建長寺様では時頼公の墓所が現在不明とのこと。

正式墓所となっているのは　末寺の明月院様です。

明月院様では墓参の上、本堂にて私が時頼公塑像の真ん前に満資公位牌とともに坐らせていただき、明月院の御住職が自ら鐘と木魚をたたかれ、読経・焼香をさせていただきました。

そして書院にて抹茶と「松江の生菓子」の展待を受けました。

鎌倉　建長寺様

鎌倉臨済宗御本山建長寺様に拝登。
礼をつくしての過分なる特別歓待を賜りました。
写真、弘長寺開基様の位牌を抱く住職の向かって左隣は、高井建長寺宗務総長老師、前列向かって左から二番目が鈴木先生。
於：大方丈　　二十一名参加

見えない世界

弘長寺護持会
会長　武田民三

明けましておめでとうございます。

今年の正月は、ことのほか暖かく、元旦三ヶ日の大般若転読祈祷会にお参りが、気もちよくできました。

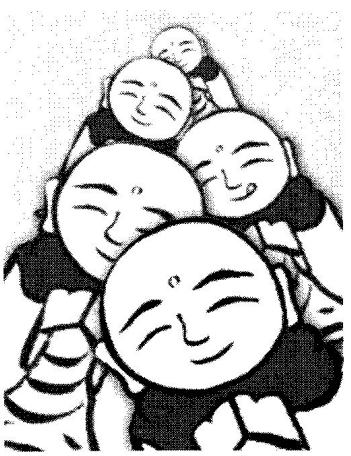
世界の平均気温が、一八九一年の統計開始以降で過去最高となり（日本の年平均気温も一八九八年統計開始以来、四番目の高さとか）、今後の気温上昇傾向は変わらない見込みと報じています。（インドでは五月の熱波で二，三〇〇人、パキスタンでは六月に一，二〇〇人以上の人が死亡したとのこと）

さて、或る護持会員さんから「生と死」について質問されたことがありました。（お断りしておきますが、別に私は宿命論者ではありません。）

誰でも一度は、「自分は一体何だろう」「私は何のために生きているのか」、そして「何処から来たのだろうか、そして何処へ行くのか」と思われたことがありますでしょう。

でも現実には成人するにつれて、多数の知識・常識を得て、それを基本にした忙しい日々を送るようになります。

すると、以前に疑問を持っていた事は忘れてしまい、多忙な日々に流されて行くのでしょうね。



しかし、それこそが本当に根本的なことであると思うのです。

ところで、近年の自殺事故は増加の一途で、社会問題として憂慮されていましたが、平成二十七年は減少したと報じています。

それでも、まだ一日に五〜六〇人の自殺者があるのが現況であります。

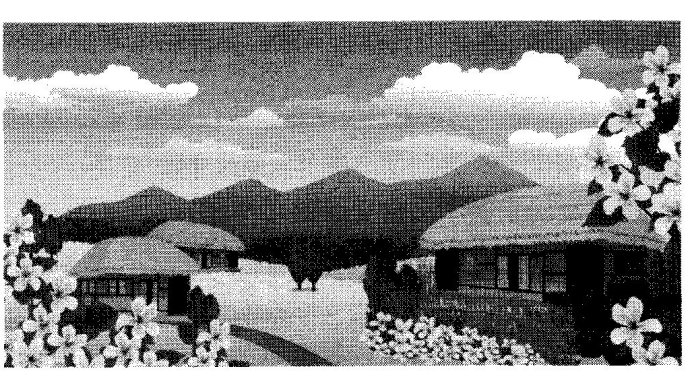
一方、「誰でも良かった」とか「殺してみたかった」の一言で、全く関係もない人の命を、あたかもゲームでもするような感じで殺人を犯す人間が沢山あらわれて来ています。

この事は、自分の生命も、他人の生命も、その尊さを自覚しないことに依ることからだと思いますね。

以前に、この寺報でも述べさせて頂いたことがありますが、眼に見える世界だけが、実在する世界で、見えない存在は認めないとの考えから事故、事件を起こしていることが多いのではないのでしょうか。

今や、見えない世界が、どんどん科学によって解明されていることを知れば、「見えない世界は認めない」という考え方はナンセンスであることに気付くのでは。

最近の材料資源開発では、紙の成分である植物の細胞（パルプ）を、廃棄物（植物のしぼりかす）から「セルロースナノファイバー」と称するナノレベル（一〇億分の一単位）の再生可能物質を活用しようと進められつつあります。



石油に代わる素材として、森林素材から構造材料が生まれようとしているのです。

フィルムにし、それを重ねあわせて鉄板に代わる構造材として、車や飛行機などに利用することを、世界に先駆けて、今！日本で進められているのです。

この眼で見ることのできる、この世の作品（現象界）は人の造ったもので、不完全なものや病気、不幸、災難、危機的な出来事が沢山ある。（だから、人は時々神や佛に祈ったり、懇願して、そこから抜け出そうとするんですが）しかし「実在の存

在」は見えない。

眼に見えている現象界は「表現するステージ」であり、ワクワクするような「夢」を表現する場であり、「スクリーン」であるとも。

最近読んだ本に「明るい死後世界～従来の（あの世）説）は間違っていた！」があります。

この著者は、一九五四年生まれの東京大学理学部物理学科卒で、カナダのトロント大学電子工学科修士課程を修了し、ソニー（株）で半導体素子の開発に従事し、その後米国のカリフォルニア州にある光通信用半導体素子メーカーのSDL社で半導体レーザー開発を手がけていた物理学者ですが。

この本の中に、「自殺者はどこへ行くのか」との章がありまして、「自殺者は、生前の思いを、そのまま引きずっていることが多い」と述べています。

死後について特定の考えを持っていると、それに一致するところへ行く…と。

とにかく、一読に値する著書ですので、参考までに紹介いたします。

改めて「自分が生まれて来た理由とは、一体何なのか」を考えてみますと、人は偶然に生まれて来たのではない、自ら望んだ両親を縁として、この世界に生まれて、願いを持って人生を始めた「魂の存在である」と説かれています。

私たちが、自分に与えられた人生というチャンスを本当に全うするためには、どうしても人生を魂の次元から捉えることが必要なのですね。

形のある眼に見える世界に対して、形のない見えない世界こそが実在の世界であると教えられます。

そして人は本来、神性、佛性そのものであり、人は互いに合掌し合うのであり、相手の本性にも佛性、神性を認め礼拝する、と。（「生と死の教え」日本教文社刊）

だから、敬神宗祖の心を子孫に伝えて行くことが大切となります。

世代間の正義（倫理）を育んで行くことで救われるのであり、「生き方」で示して行くのですね。

少し長くなりましたが、最近特に感じていることを述べさせて頂きました。

これからも、一層の修行を重ね、心の豊かな人生を生きようではありませんか。

ありがとうございます。

合掌

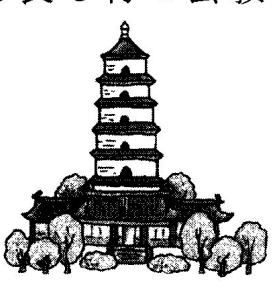
新年を迎えて

護持会副会長　坂本研次

あけましておめでとうございます。

本堂の修改築の全てが成ってから初めての元日は、穏やかな天候にmぽ恵まれ、静かにゆったりとお寺の参拝が出来ました。

昨秋は、弘長寺護持会と教区護持会の二つの研修旅行に参加して、建長寺様はじめ鎌倉や京都の名刹を巡拝しました。



各寺院様からは、心暖まるおもてなしのうえに、仏像や伽藍などのお宝を特別ご懇切な解説のもとに拝観し、また有り難い法話をいただいて、心洗われました。

私たちの菩提寺にも有り難い歴史を、心と力を合わせて引き継いで来た貴い財宝があります。

本堂の耐震修改築や寺域の整備にも現れています。

観光地のお寺に比べ、静寂なお寺は、心静かに安らぎを覚え、有り難さが自ずと湧いてきます。

私も随分齢を重ねましたが、せめて護持会費納入のお手伝いをさせていただきたいと念じています。

また先日種苗社から花や、野菜種子のカタログが届きました。

やがて来る春が楽しみです。

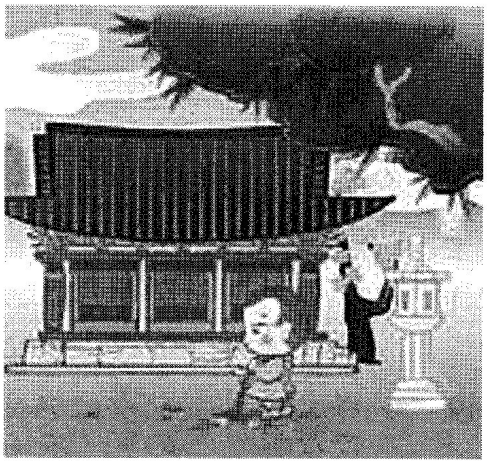
今年もたんぼや畑で、イネや野菜やハナノご機嫌を伺いながらすごしてみたいです。

どうか今年は、世界中が平和でありますよう。

お寺のご隆昌、お檀家皆さまのお幸せをお祈りいたします。

大般若会やお盆の施食会などで皆様にお会いすることを楽しみにしています。

合掌、



今年こそ！

護持会副会長　内田　松寿

新年明けましておめでとうございます。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

日本人の四人に一人が六十五歳以上の高齢者である超高齢者社会を迎えました。

私もそのうちの一人です。

年を取ると身体が弱り、歩く速度も遅くなります。

体力や記憶力の衰えが目立ち、今までできていたことがだんだんとできなくなっていくもどかしさがあります。

しかし老いることは何もマイナスばかりではありません。

年を重ねることによって社会や会社の組織から離れ、自由が得られることです。

時間だけでなく、成果や数字などによって評価されることからも解放され、気持ちも軽くなり、じっくり自己を見つめることができるようになります。

またいのちについて身近に意識するようになることです。

親、親しい友だちなどが先に逝き、今は一応健康だけれども、遠からず死ぬだろうということを嫌でも考えさせられます。

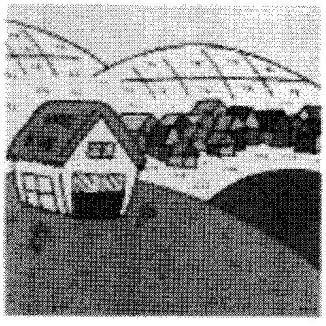
健康でいようと思って古稀を機に一念発起、昨年一月からほぼ毎日早朝約一時間のウオーキングをしています。

今のところ本郷橋から久戸大橋まで来待川をぐるりと一周するコースで、その日の気分によって半分ぐらいはジョギングすることもあります。

日常生活の活性化や生活習慣病の予防・改善に寄与していると思います。

シンガーソングライターの小椋佳さんは「歩禅」と称して雨風、暑さ寒さも関係なく毎朝必ず一時間、散歩をしているとのことです。

脳に適当な刺激になるようで考え事ができ、意外なことを思いついたりして、CDやその歌の種のほとんどは歩禅の中から生まれたと言っています。（ラジオ深夜便no. 173）



一月五日付山陰中央新報のこだま欄、七十二歳の女性の投稿から、

『皆様に迷惑をかけないようにと、せめて足腰だけでも丈夫でありたいと還暦後から始めたウオーキング。毎日距離にして十キロ、歩数にして一万五千歩、時間にして一時間五十分。そのおかげか、体の調子は良く、薬の服用もない。

医療費の抑制には貢献していると思う』

意思の強さや行動力にはただただ感心するばかりです。

少しでも近づきたいものです。

あと五キロ
減らせば理想我が体重
今年こそはと
日の出に誓う

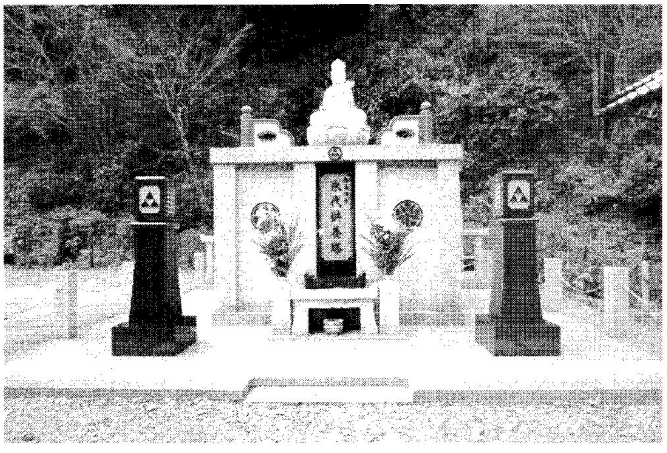
合掌

お知らせ　お願い

●永代供養塔追加荘厳しました

二年半前、第三墓地阿弥陀堂横に永代供養塔を建立いたしましたが、何か物足りない思いを抱いておりました。

やっと水溜がないし灯籠がないことがわかり、松石石工さんに頼み、追加荘厳いたしました。



供養塔廻りも支柱を何本か造り、チェーンでつなぎました。

観音様も坐像故に小さ見えしますので、四隅に高欄をつけました。

後は仏像に光背をつけたいと思っていますが、（できれば台風時に取り外しが可能な細工）難しい仕事だとのことですから実現するかどうかはわかりません。

時代の流れでしょうか、最近は都会に若い方がいらっしゃっても「永代供養塔」に入りたいという方も出てこられました。

需要の増加に伴い、最近は永代供養塔も、殆どのお寺さんで造られるようになりました。

永代供養塔が栄えるご時世は、決して手放しでは喜べないのですが。

第一・第二・第三墓地は檀家の方、或いは檀家見込みの方に限りますが、永代供養塔は宗派や檀家を問いません。

どなたでも結構です。

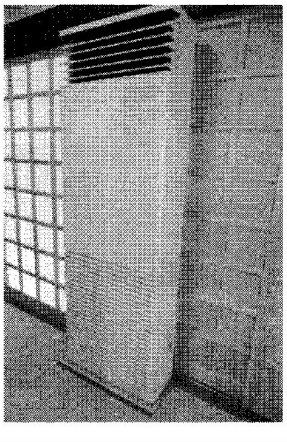
●本堂にエアコンが入りました

武田護持会長の強いご希望で本堂の東西脇間にエアコンが入りました。

場所を取らない薄型でかなり強力です。

施食会前日の工事完了となり、おかげで涼しい施食会を行うことができました。

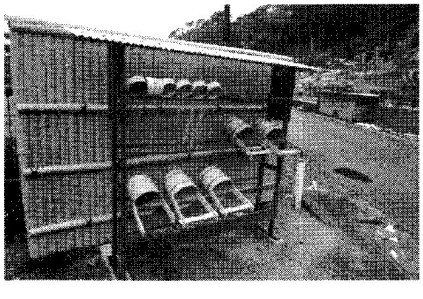
これで夏冬共に外気を考えることなく法要ができます。



●墓地の水桶置き場を改良しました

墓地の水桶置き場が雨ざらしで、すぐ桶が傷む状況だったので、風よけと簡単な屋根を着けました。

墓地管理費（水道代等）をいただいておりますので、その範囲内で対応しますが、何かご要望がありましたら申し出て下さい。



お知らせ　お願い

●大裕が副住職に

大裕を副住職にいたしました。

これで私が亡くなっても、煩雑な手続き処理をしなくても即住職になることができます。

それでは今号から本人の文を載せることにいたします。

副住職　森田大裕

『突然寺報にスペースを頂きまして、何を書こうか考えていた所、お酒の席でとある檀家様が突然「延命十句観音経」をお唱えされ「うちのお婆さんがよく唱えてたんだけど、これって何のお経なんですか？」と仰りました。

その場で詳しい説明はしませんでしたが、こういった事にも皆様興味がおありの様ですので、ここではお経についてごく簡単な解説をしていきたいと思います。

さて、その「延命十句観音経」ですが、こちらは題の通りひたすらに観音様を信仰する内容のものです。

経文中の「常楽我浄」という一節ですが、これは観音様を念じる事で所謂「四徳」を頂けます様に、という意味です。

それぞれ「常徳…無常を理解する事」「楽徳…苦しみから脱する事」「我…ご縁を大切にし他の為に我を使う事」「浄…人や物を差別しない慈悲の心」拙い解釈ですが私はこう思っています。

全文を解説するのが筋ではありますが文字数の都合上この辺りで。』

合掌

●大本山永平寺参拝

平成二十八年度本山参拝は永平寺様の番です。（總持寺と一年交代）

○期日

平成二十八年六月二十七日（月）～二十九日（水）（二泊三日）

○会費

五万九千円

二泊三日のバスの旅で、一日目は大本山永平寺様で参籠いたします。

二日目は、滋賀県朽木の高巌山興聖寺様（国指定文化財秀隣寺庭園）へ参拝、京都亀岡湯ノ花温泉に宿泊、

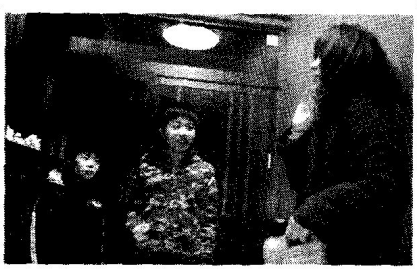
三日目は、京都漬け物工場を見学して、亀岡から乗船し保津川下りで嵐山到着、嵐山散策となっています。

一人でも参加者があれば、住職か副住職が同行いたします。

三月末日までにお申し込み下さい。（募集百二十名、定員になり次第締め切り）

●大晦日の鐘撞き

今年の幸運を撞いた方達



いざ鎌倉！
護持会研修旅行

住職

今回の鎌倉研修の目的は、弘長寺の開基様・藤原（成田？別府？）満資公自筆文書にあるように、特に主君・北条時頼公に対する忠誠の思いを実現させるべく満資公の位牌を持参し、時頼公菩提寺である建長寺様の本堂にて読経させていただき、さらに明月院様に墓所が現存するため、満資公の位牌とともに墓参させていただき、満資公に喜んでいただくことが一点。

そしてもう一点は武州（武蔵野）成田氏が寺社の寄進状に署名する際は必ず「藤原朝臣（あそん）」と記載しているので、「成田（藤原朝臣）満資」なのかそれとも「藤原満資」なのかの真実に迫りたいと思ったからです。

成田氏の中には「藤原姓」を名乗った者もいるとのことなので、どちらとも取れますから、そこら辺の不明な点を明らかにしたかったのです。

いや、そもそも光助は成田氏ではなく別府氏であり、別府氏（熊谷市に現在も別府という所在地があります）も東西別府があり、光助は西別府氏であると、埼玉県熊谷市の学者先生の説がネットに載っていました。

だから別府満資（光助）という可能性もあるわけです。

面白いのですが、訳がわからなくなってきて、訳のわからないまま出かけることになりました。

北条氏と藤原氏の関係を理解すれば、その解明に案外近づけるのではないかと思いました。

大方丈にて本尊上供、手前は高井老師と鈴木先生

関東の天気予報は二日目は快晴なのですが、一日目は東京・神奈川共に雨マークでした。

ところがなんと奇跡です、おそらくお喜びになった満資公と時頼公のおかげでしょう、二日間一回も傘をささずに済んだのです。

大仏前で鈴木先生と合流、市内を先生のガイドで観光しました。

何故鎌倉という名前がついたかの説明をされたのですが、浄妙寺には、鎌倉の地名の由来ともされる藤原鎌足の「鎌槍伝説」が残されている。

昔、藤原鎌足は、鹿島神宮参詣の途中で由比の里（現鎌倉）に宿泊した。

すると、夢に現れた老人から「鎌槍をこの地に埋めれば天下はよく治まる」というお告げを受け、白狐に導かれるまま所持していた鎌と槍を浄妙寺の裏山に埋めたのだという。（鶴岡八幡宮の裏山、大臣山に埋めたという説もある）

浄妙寺の奥に鎌足神社があります。

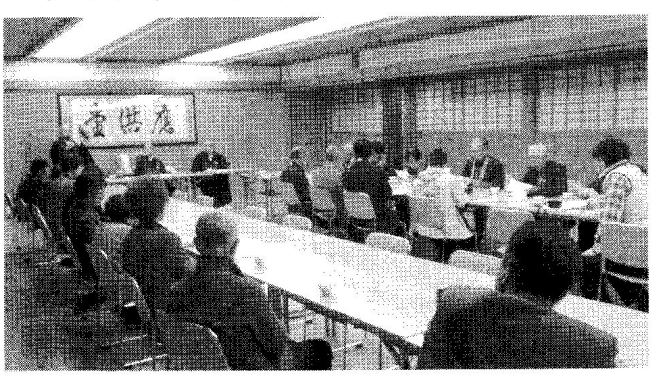
鎌倉という地名は、この鎌足の「鎌槍」から生まれたという説明を受け、面白いと思いました。

そして藤原鎌足（藤原氏）と鎌倉との深い因縁がわかりました。

そして建長寺様では、鈴木先生のお陰で一般観光では絶対入れないところまで拝観させていただきました。

客殿（應供堂）にて高井宗務総長老師のお話を賜りました。

北条時頼公縁の寺院は全国に多く存在するのですが、時頼公がその地にお出ましになって、自らが開基として建立されたとする伝説のお寺が殆どだそうです。



高井宗務総長老師のお話を聞きました。

弘長寺のように開基地頭名が明確で、自筆文書まで存在するのは極めて稀だそうです。

それ故に大変な歓待を賜ったのだと思います。

時頼公のお墓が現在不明だそうですが、「おそらく今禅師様がいらっしゃるお部屋の下辺りが可能性が高い」とのお話でした。

明月院様迄は結構遠いとのことで、高井老師が直接明月院近くの土産物店に電話をかけられ、普通車で満杯のそのお店の駐車場に無理矢理バスを入れさせてもらいました。

お陰で随分近道ができました。明月院様は紫陽花寺で有名で、六月の開花時にはものすごい観光客だそうです。

明月院本堂にて読経、手前は明月院住職老師

紫陽花寺：明月院本堂　一般拝観は柵の手前まで

今回の研修旅行は全て北条氏に因んだ場所でした。

二日目、江ノ島へ参りました。

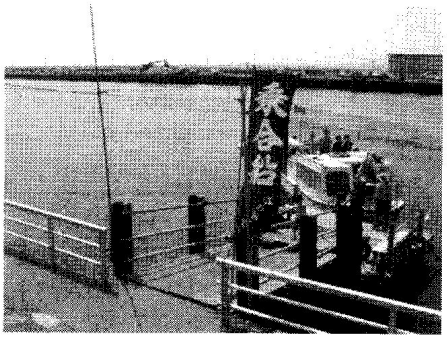
ご承知のように北条氏の紋は三つ鱗です、故に弘長寺の寺紋も三つ鱗です。

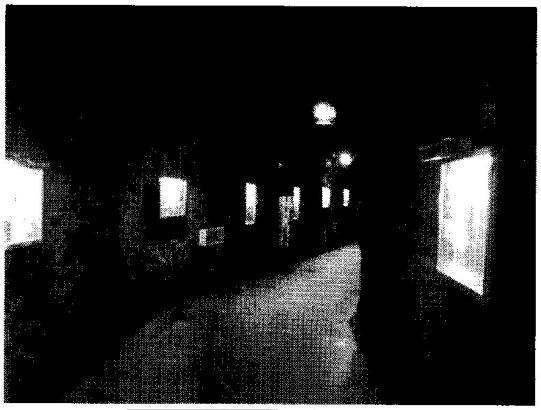
これは、初代執権・北条時政が江ノ島弁財天（日本三大弁財天の一つ）に子孫繁栄を祈願したとき、美女に変身した大蛇が神託を告げ、三枚の鱗を残して消えたことに因むということだそうです。

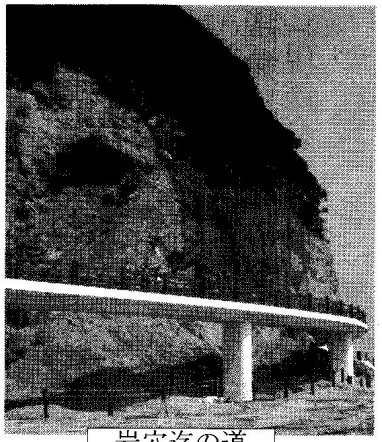
江ノ島岩屋は、北条氏の先祖が参籠（一定期間神社仏閣にこもること）した場所です。

長い歳月を経て波の浸食でできた岩屋は、古くから信仰の対象にもされてきました。

弘法大師が訪れた際には弁財天がその姿を現し、また源頼朝が戦勝祈願に訪れたとも言われています。


乗合船に乗る


岩穴内部

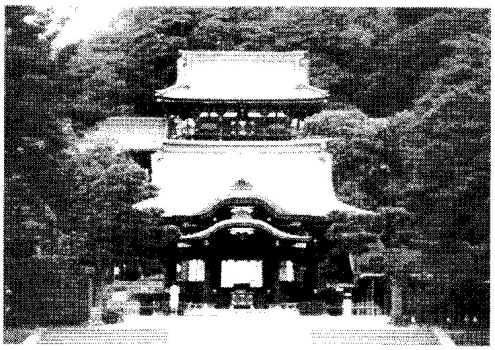

岩穴迄の道

最後は鶴岡八幡宮にお詣りしました。

鎌倉幕府の宗社として鎌倉の町づくりの中心となったものです。

さすがのスケールに圧倒されました。

一泊二日でしたが、内容充実の研修旅行でした。


鶴岡八幡宮

住職は考える①（住職の独り言）

修証一如における悟りの正体に迫ってみる

住職

申し訳ないのですが、この文章はご寺院向けです。（次号はお檀家様向けにいたします）なので、イラスト・写真も敢えて入れません。

寺報三十一号を出した後で、二・三のお檀家様からご忠告をいただきました。

あまりにも表現がきつくて批判的過ぎるのではないかと。

そう言われて「しまった」と思いました。

この箇所（文）はご寺院向けですよ、とのコメントを入れ忘れてしまったのです。

私を案じてのご忠告は有り難く思いました。

今更弁解しても遅いのですがしかし、それも想定内のご意見でした。

確かにお檀家様にとっては「自分の所属している宗派はそんなにひどいのか」と思われても仕方がないと思います。

ただ私が書いていることは、週刊誌等でも大々的に掲載された事実ですので、隠す必要もありませんし、またことさらさようにひどいのが現実です。

曹洞宗の教え、道元様の教えそのものは揺るぎのない尊い教えなのですが、それが教団というグループになり年月を経ると、内部で派閥が生じたり利権を争ったりするのです。

それはだから、曹洞宗に限りません。

曹洞宗はまだ永平寺と總持寺の両大本山だからまだ良い方ですが、臨済宗などは十三派にも別れてそれぞれ大本山を持っています。

真言宗も総本山が十四ヶ寺、大本山が七ヶ寺でどうなってるんでしょうね。

日蓮宗などは総本山だけは一つにまとまったのですが、その他は離脱、合流を繰り返し、現在は、大本山七ヵ寺・本山五十ヶ寺で訳がわかりません。

浄土宗も五派ありそれぞれ総本山を持ち、真宗も東西本願寺をメインに十派有ります。

各宗派のルーツともいうべき天台宗でさえ二十の派を抱えます。

沢木興道老師の言葉に「グループぼけ」というのがありますが、まさにピッタリの表現です。

ぼけのその内容は…いっぱいありすぎますので、書くのはやはりやめておきます。

ですから宗教団体だからといって聖人君子視（あるいは性善説的見方）をするのはおやめになった方がよいと思います。

何故私が批判をするかといえば、週刊誌に掲載されるような恥ずべき事件を教団が立て続けに数回起こし、全国の寺院・壇信徒に多大な損害を与えています。

それに対して、全国の寺院僧侶から怒りの声が殆ど聞こえてこないからであります。

この島根もそうです、それに一番怒りを覚えます。

何故怒りの声が聞こえてこないのかを分析した論説によれば、『大部分の曹洞宗寺院僧侶は、中央で何が起こっていようがあまり関心がない。

中央で大損害が出たとしても、そのために自分が少し声を出しても中央にはおそらく届かないだろうし、僧侶が怒りを前面に出してもそれは自分の立場上僧侶らしくないと思われて損だ。怒りや批判は他の僧侶に任せて自分は手を汚さずにおこう、自分は、自分のお寺が無事安泰ならそれでよい。』

そう思っている。

無関心、あるいは解っていても無関心を装う宗侶だらけということです。

当に的確な分析、だけに余計批判したくなるのです。

私の批判の矛先は、議会や宗務庁よりも、本当は怒りを出そうとしない宗門の僧侶に対しての方が大きいのです。

一握りの改革議員が叫んでも教団は中々変わるものではありませんが、全国の宗侶が本気で怒ったら絶対に百八十度変わります。

私…森田裕光自身が所属する私の宗門・教団に、これ以上過ちを犯さない、まとまな教団に是非なっていただきたいという願いからの批判なのです。

誰も批判しなくなったら、宗門は必ず五の轍、六の轍を踏みます、間違いありません。

改革を目指す士がおられて奮闘されているのもわかるのですが、最近よく耳にする言葉、改革よりも革命の士が出てこないものでしょうか。

（絶望的な想いですが）

住職は考える②

私が批判するのは、私が間もなく清浄法身（シンジンパーシン）の身となるからです。

巷の噂では、「良い人は早死にする」ということなので、それなら間もなくであろうと思われるからです。

…あ、これは冗談。

でも私を将来介護する話ばかりしていた家内が五十五才の若さで二年前に亡くなったばかりですから、案外冗談ではないのかもしれませんので。（糖尿病ですし、今は回復しましたが昨年は一時期膝が痛く正座ができなくなりましたし、妙に忘れっぽくなってきました）

ま、それはともかくとして、今後批判はなるべく控えめにしようと思います。（自信は全くないのですが）

・道元禅は贅沢禅？

さて　前号からの続きです。

悟りについてもう少し深めてみようと思います。

道元禅は、一面では贅沢禅ではないかと思えるのですが、そのような考え方はおかしいのでしょうか？

何故かといえば　道元禅師には完璧なスポンサーがついているからです。

穿った見方をすれば、「国王大臣に近づくことなかれ」という如浄禅師の言葉に忠実である為には、波多野義重公も厳密に言えば志比之庄の国王（地頭）ではないだろうか。

義重公は北条重時（執権時頼の養父）の娘を妻にしています、つまり幕府の最高権力者と濃い親戚関係です。

そして道元禅師を鎌倉執権の元に推挙・招聘するほど、地方における権力を有した、鎌倉幕府の中では中枢に発言力を持つかなりの存在だったということではないでしょうか。

私が贅沢というのは、贅の限りをつくすという意味ではなく、修行の身であるのに食べることの心配が皆無である中での坐禅は、一面では幸せな贅沢禅だと思う。

勿論、随聞記の中でも貧学道を説かれていて、食べ物がなくて空腹の修行僧に対しての説法もあることから、十分な食事ではなかったことは推察できますが、しかし最後の切り札には外護者波多野公の存在による絶大なる安心感があったことは間違いないでしょう。

そういえば、赴粥飯法や典座教訓にも材料の扱いや調理姿勢、食べる時の心構えなどは教えがあるのですが、食材の入手法や托鉢についての記述はありません。（あったらごめんなさい、ご指摘願います）

道元禅師が中国に渡り、僧侶の資格問題により寧波港で三ヶ月も足止めされた。

その時に老典座が椎茸を買い求めに来た。その老典座との問答も面白いのだが、それはさておき、食材を典座が買い求めに来るということは、当時の中国の寺院僧侶は、托鉢よりも宋の公的機関（天子）からお金を（維持費）いただいていた公務員ではないかと推察できる。

だから具足戒だけで比丘戒を受けていない道元禅師が天子から足止めを受けたのも、寺院が公的機関に管理されていたからだと思います。

だから、道元禅師は中国でも托鉢という修行にはあまりお目にかかることができなかったのかもしれない。

しかし、お釈迦様の仏道では托鉢が基本です。

それはテレビ等でよく見掛ける南伝仏教（ビルマ・タイ等）の托鉢の情景に受け継がれています。

ただ、南伝仏教の托鉢もやはり贅沢仏教ですよね、何故なら一般大衆は食べ物を差し出す習慣を持っていて、殆ど義務化されたシステムの上に成り立っているからです。

（国民は法律により一生に一度は必ず出家する、自分もいつかはもらう立場になるのだから差し出すのも真剣にならざるを得ない）

つまりこれも食べる心配がないのと一緒です。

お釈迦様の托鉢は　一切食べ物が手にはいらなかったこともしばしばでしたでしょう。

そういう風に思えば、食事に関する心配をせずに坐禅三昧に浸れるというのは、その当時、ある意味では幸せで贅沢だったと思うのです。

・大乗寺も大本山に

ただ、スポンサー付きの運営に慣れてしまった教団が、いざスポンサーがいなくなった時には慌てる羽目になります。

その心配をされて中国に渡り、教団の維持運営に気配りをされたのが螢山禅師のお師匠様である徹通義介禅師です。

住職は考える ③

純粋な禅だけを考えていては運営が成り立たないので、積極的に加持祈祷・葬儀・法要を取り入れられたのです。

ですから瑩山禅師の総持寺を大本山とするならば、スポンサー抜き、自力の教団維持運営システムを構築されたお師匠様である義介禅師の大乗寺も大本山にすべきだと思います。

教団が大発展する礎は義介禅師にこそあると思えるからです。

・両大本山という問題

第三者の視点で見れば、四世瑩山禅師はあくまでも単なる中興の祖です。

真宗でいえば、八代蓮如上人と同じです。（でも蓮如上人は親鸞聖人と肩を並べていない）

古くて新しい問題としていつの時代にも取り上げられるのが、その中興の祖が開祖と肩を並べて両大本山というのはおかしいのではないかという問題、確かに論理的にはそうなのですが、歴史的に深い因縁が存在するものですから一概に断じ切ることはできません。

前の寺報でも書いていますが、歴史的にみれば永平寺は四代目の義演禅師までで、一旦断絶したのです。

その後で寂円門下の僧が後を継ぐのですが、往時の勢力は全くありませんでした。

室町時代には、総持寺が本山で永平寺は普通の一般寺院扱いされる時期もあったほどです。一六一五年江戸幕府の寺院法度により永平・総持共に両大本山の指定を受けます。

明治二十年には、永平寺を総本山に、総持寺を大本山にという意見が出たことに対して、全国的な大問題となり明治二十七年森田悟由禅師が永平寺を退くことで決着をみた経緯があります。

過去の経緯をみれば、問題を起こして擦った揉んだで争っただけ損、ということになるようです。

・興聖寺も大本山に

ただ、個人的には大乗寺とも一ヵ寺、宇治の興聖寺（初開の道場）も大本山にすべきだと思います。

だって永平寺に行かれる前十年間は興聖寺が道元禅師の道場だったではありませんか。

比叡山からの危険がなければ二十年間道元禅師の道場（大本山）になっていたはずです。

私が修行した道場だからと言うわけではありませんよ。

いずれにしても両本山という仕組みがガッチリと構成されている以上、余計な言動は骨折り損のくたびれ儲けになるということです。

（この件はインターネットで調べればかなり詳しく載っていますが、それをこの寺報に載せるのも、余計なお世話の骨折り損なのかもしれません。）

・修証一如の悟りに条件はないのか

あ、忘れていました、そうそう悟りの問題でしたですね。

道元禅師は修証一如（一等）ですから坐ったそのままが悟りであり、仏だと説かれました。

しかし、本当にそうだろうかと疑問がフツフツと湧いてきます。

また横道に逸れるのですが、私などはすぐ疑問が湧きだしてくるのですが、他の宗侶の皆さまはそんなことがないのでしょうか。（教え通りに素直に信じられる方はうらやましいかぎりです）

多少の疑念は飲み込めとのご指摘もあるのですが、でもそれはお釈迦様や道元禅師に対して失礼な話ですよね。

お釈迦様は、何故人間世界は苦しいのか、そして最後は何故死ぬのかとの疑念から出家されています。

道元禅師も、人間本来仏なら何故さらに修行が必要かという疑問から、命がけで中国に渡られている。

徹頭徹尾、疑問を解決する一心で修行を極められたのではないでしょうか。

だから疑問を持つことは、ある意味求道のスタートであり、その疑念が修行の支え・励みともなり得るのではないかと思いますが、ちがうのでしょうか。

問題意識を持ち、疑念があればこそ求めんとする意志がより強固になると思われますので、進んで疑念を持つべきだと、逆に私は思うのですが。

それはともかく、道元禅師の修証一如の坐禅は、現代の私ども僧侶に対して条件が何もないのでしょうか。

私はあるお師家様に聞いてみました。

住職は考える ④

すると「条件などありません。どのような方でもどのような状態でも只管打坐で坐れば、その場そのままが完全なる仏で悟りの状態なのです」という答えが返ってきました。

エーっ？でも、でもですよ、道元禅師の時代のお弟子達は、完全な出家者ではないですか。この道場を一・二年で了えて、晴れてどこかのお寺の住職になるんだ、などという私どものような邪念など全くないのです。何もかも捨てて道場に入り、目の前の只管打坐しか考えなくともよい環境の中での坐禅です。その捨てきった出家者に対する教えではないでしょうか。

恥ずかしながら私の最初の坐禅は、旦過寮で数時間坐っただけで足のつけねが痛くてたまらず、早く坐禅の時間が終わらぬかと脂汗をかき、痛棒を食らいながらも頻繁に必要以上に東司に通うていたらくでした。

〈初心の弁道云々…〉とのお示しがありますが、あのころの坐禅状態を思うと、そのような状態の坐禅でも完全なる仏であり、また悟りだなどといわれても、絶対にそれは信じることができません。

現在行っている坐禅でさえも「修証一如だから、あー今仏だーとか今悟りだー」なんて全然思えないのです、皆さんは思えるんでしょうか。（無論作仏と図ることなかれは承知の上でです）

それでもそれは立派な曹洞宗の坐禅ですよ、などといわれても、それは詭弁だと確信します。

・出家至上主義の修証一如

本当の修証一如の坐禅は、身の回りを（財産も何もかも）全部捨てきった上で、身も心も一切の束縛から解き放たれたものではないかと思います。

惟るに、現代に道元禅師がいませば、私どものような坐禅に対して無条件で肯定されることは絶対にあり得ないと思います。

晩年には、特に出家至上主義に強烈に拘られました、肉親の恩をも捨てきった本当の出家者を相手に、一箇半箇の本物を育てたいとの想いが強まったのです。

今の私どもをご覧になったら、「どこが出家だ？何をもって出家というのだ？」と鼻でお笑いになるでしょう。

まず本当に全部を捨ててから出直して来い、と厳しく仰るような気がしてならないのです。

・ならばどうすべきか

私達は只管打坐とか修証一如の言葉を余りにも安易に用いすぎて、ただ何の気なしに坐ればそれで良しとして、まるで条件など要らないかのような錯覚に陥っているのではないだろうか。

もちろん、私も同類です。

でも、ホンモノの出家にはほど遠い、殆ど俗人に近い私どもは、〈捨てきれぬ身で申し訳ないとの想いを心の片隅に抱きながら謙虚な姿勢で〉坐るべきではないだろうか。

それが純粋でホンモノの道元禅に近づく大切な一歩であるような気がしています。

その一歩が、毫釐も差あれば天地懸に隔たるのです。

駒澤大学の角田泰隆教授の言葉を紹介します。

『よく、道元の教えは我々がたやすく実践できるものではないし時代も大きく変わってしまっているので、その法孫は、現代社会に相応した実践方法の生活規則を新たに定め行うべきであるという意見がある。

しかし私は、そうはおもわない。

道元の教えをそのまま心にとどめながら、それをそのまま実践できないにしても、実践できないからといってそれを改変することなく、〈実践できない自分の至らなさを反省〉しながら、それぞれ個々人の生活環境の中にあって、できるだけそれに近づけようとこころがけて精進することが、道元の生き方の追体験であると思う。』

・バイキング仏教の勧め

芥川賞作家の臨済宗僧侶・玄侑宗久師に、「私だけの仏教」という本があります。

是非一読されることをお勧めします。

全ての仏教宗派は、全て奇形である、とまず書かれています。

曹洞宗は正伝の仏法と主張していますが、それは曹洞宗に限らず、どの宗派もそう主張しているのです。

そりゃそうでしょうね、そうでなければ、仏教として認めてもらえないのですから。

その上で、色々な宗派の良いとこ取りをして、バイキングメニューを作り、今日の朝は坐禅、昼は南無妙法蓮華経、夕には南無阿弥陀仏と、仏教全体を見据えた「自分だけの仏教を作り上げる」のも面白い、と仰る。

さすが、芥川賞作家ですね。

僧侶でさえ難解な坐禅重視の宗派仏教に従うより、自分好みのより安易な、自分だけの仏教を作りだした方が、信仰をより深め得るのかもしれません。了